

トップ対談 41

組合員・地域とともに



「地域に笑顔と豊かな暮らし」を！（上）

ゲスト／眞利子 伊知郎（東京都JA東京スマイル 代表理事組合長）

●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授

京都大学学術情報メディアセンター研究員

石田正昭



いしだ・まさあき

1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』（ともに編著、家の光協会刊）。

第41回ゲスト

東京都JA東京スマイル 代表理事組合長

眞利子 伊知郎



まりこ・いちろう

1959年東京都生まれ。大学卒業後、大学に勤務し、86年に就農。江戸川区農業協同組合青年部長、JA東京青壮年組織協議会委員長、全国農協青年組織協議会副委員長などを務め、2017年東京スマイル農業協同組合理事就任。専務理事を経て20年から現職。相続や税務の相談対応力強化のため、職員教育にも力を入れる。

JA東京スマイル(東京スマイル農業協同組合)

2001年4月、江東三区にある3JA(足立農業協同組合・葛飾農業協同組合・江戸川区農業協同組合)が合併し、東京スマイル農業協同組合が誕生。管内農地の85%が生産緑地農地に指定され、生産効率を考えた施設化も進む。



●組織の概況

組合員数：14,305(正組合員：4,553、准組合員：9,752)

役員数：34(常勤・非常勤含む)

職員数：職員282人(臨時職員含む)

設立：2001年4月

貸出金：1,509億円

本店所在地：東京都葛飾区白鳥
4-11-17

長期共済保有高：6,166億円

購買品供給・取扱高：1億6,958万円

出資金：7億9,525万円

受託販売品・取扱高：9,091万円

貯金：3,341億円

(令和6(2024)年度実績)

●地域と農業の概況

管内は宅地化、商業地化が進むなか、東京23区内で農業が営まれている数少ない地域。コマツナ、エダマメ、キャベツ、トマトなどの野菜が栽培され、江戸川区ではコマツナの収穫量が都内トップを誇る。また、ブルーベリーの観光農園の経営やツマモノ栽培、アサガオをはじめとした花き類の栽培も盛んに行われている。

「地域に笑顔と豊かな暮らし」を！

東京都足立区、葛飾区、江戸川区と江東区の一部を管轄するＪＡ東京スマイル。江戸時代から続く近郊野菜産地で、地域特産物としてコマツナがある。青年農業者の時代から東京に「農地・農業を残したい」と考え、都市農業振興と地域住民の農業理解の向上に努めてきた。今回はそんな思いと行動を眞利子伊知郎組合長に語ってもらった。

■「農地・農業を残したい」の一心で

石田：貴兄はこれまでＪＡ東京青壮年組織協議会委員長、東京都農業経営者クラブ会長をはじめ、地域諸団体やＪＡの要職をたくさん務めてこられました。その間にどんなことを学び、どんなことを重視してきたか、お聞かせください。

眞利子：わたしは昭和57(1982)年3月に法政大学文学部を卒業し、4月から法政大学に勤務しました。そんな折、昭和60(1985)年に父親が急逝して農地を相続することになり、昭和61(1986)年4月から農業経営を開始しました。

当時、10年以上耕作する意思があれば市街化区域内農地に対する宅地並み課税が猶予されるという「長期営農継続農地」の指定ならびに「相続税納税猶予制度」による20年の納税猶予の適用を受けていましたので、父親の後を継いで農業を始めました。思いもかけない早期就農でした。

石田：お住まいは江戸川区ですから、つくられたのはコマツナですか？

眞利子：コマツナを含む野菜全般でした。江戸川区はもともとコマツナの発祥の地ですが、父親は四季を通じていろいろな野菜、たとえば夏はもろきゅう(キュウリを若採りしたもの)、冬はネギやキャベツなどもつくっていました。昭和50(1975)年に下水道が完備される以前は、農業用水がありましたので米もつくっていました。あまり知られていませんが、江東三区(足立区、葛飾区、江戸川区)は米の産地でもありました。

石田：江戸川区が置かれた南葛飾郡一帯(葛西地区と呼ばれる)は、江戸のまちの下肥を小名木川、新川を通して「葛西舟」で運び入れ、それを肥料にして育てた野菜を逆ルートで江戸のまちに運びだすという「近郊野菜産地」として発展してきました。江戸時代からの野菜農家ですか？



眞利子組合長もコマツナを栽培している

眞利子：そうです。10代目に当たります。父親の代は2町歩くらいの農地がありましたが、戦後の農地解放で相当減らされてしまい、わたしが就農したときの農地は4反5畝でした。

就農した昭和61(1986)年は中曽根康弘内閣の時代で、バブル景気の萌芽期でした。農業を始めたとたん、いろいろな金融機関がやってきて「相続でたいへんでしょう。農地を売ってはどうか。必要ならお金も貸しますよ」などと毎日のようにうるさく言ってきました。もちろん農協は来ませんでした。

せっかく始めた農業なのに、やっかい者みたいな扱いをされて、なぜこんなひどい扱いを受けなければならないのかと思い、誘われるままに農協青年部に入りました。当時、東京都の農協青壮年組織は宅地並み課税反対、生産緑地法の改悪反対に一生懸命に取り組んでいて、そういう先輩たちの行動に刺激を受けて青年部活動にのめり込んでいきました。

石田：盛り上がっていた時代ですね。

眞利子：有名な白石好孝さん(全国農協青年組織協議会元委員長、現全国農業体験農園協会副会長)、須藤正敏さん(旧三鷹市農協青年部部長、のちにJ A東京むさし代表理事組合長、J A東京中央会会長、J A全中副会長)を中心に皆さん頑張っていましたからね。その運動の成果が平成3(1991)年の新生産緑地法の制定につながったと考えています。

それ以降、わたしはJ A東京青壮年組織協議会委員長であったり、東京都農業経営者クラブの会長であったり、行政側の取り組みを含めてですが、都市農業振興に一貫して取り組んできました。その根底には、東京に「農地・農業を残したい」という強い思いがありました。

■ 阪神・淡路大震災で風向きが変わった

石田：東京に「農地・農業は要らない」という雰囲気が変わったのは、いつ頃のことでしょうか？

眞利子：バブル経済の崩壊とわれわれ青年農業者の運動への理解が広がったことがあげられますが、大きく変わったのは平成7(1995)年1月の阪神・淡路大震災でした。これを機に市街化区域内農地を都市の防災空間として活用しよう、そのために都市農業を積極的に応援しようという動きが広まりました。都政でいうと鈴木俊一知事の時代でした。

たとえば、わたしの在所の江戸川区農業経営者クラブでは、東京都と江戸川区が3分の1ずつ出し合って農業資材を購入したり、パイプハウスを建てたりするときの助成を行うようになりました。生産者の負担が3分の1に減りましたので、パイプハウスを建ててコマツナを周年栽培する機運が高まりました。コマツナのいいところは連作障害が出にくいことです。

わたしも5年ぐらいかけてですが、合計で3,000㎡のパイプハウスを建ててコマツナの周年栽培を始めました。先人たちがいましたので、その人たちから教えてもらって始めました。

石田：就農当時、どちらへ出荷されていたか？

眞利子：神田市場（秋葉原）の東京青果（東一）です。個人出荷でした。

石田：秋葉原まで一本道ですから輸送には便利ですね。市場での屋号は？

眞利子：「眞利庄」。先祖の名前が眞利子の庄七だったからです。

石田：一口に「江東三区」と呼んでいますが、足立区、葛飾区、江戸川区はそれぞれ街道筋が別で、人的には必ずしも近い関係ではなかったように感じます。その点はいかがでしょう。

眞利子：おっしゃるとおりで、合併前のつながりは必ずしも強いものではありませんでした。合併後に新しいつながりはできましたが、出荷組合というか、生産者組織は現在も統合されていません。

ただ、葛飾区西亀有に「東京都立農産高等学校」があって、農家組合員にその出身者が多いことが特徴です。同級生とか先輩・後輩とかの人的なつながりは現在も維持されています。

石田：都市開発の時期もいささか違うように感じます。とくに足立区は「つくばエクスプレス」ができてから開発が急速に進んだように感じます。

眞利子：そうですね。区画整理や住宅建設などが急速に進み、近年、農地の減少がもっとも著しいのは足立区です。

歴史的にみると、暮らしの豊かさという点では、江戸川区が近郊野菜のほか、ノリやアサリの産地でもあったことから比較的恵まれていました。ただ、東京湾の埋め立てで漁業権を売ってしまい、もはやその面影は残っていません。当時、その補償金が農協に集まりましたので、合併前の江戸川区農協は日本一の貯金量を誇ったこともありました。

令和7(2025)年3月現在、農地面積は足立区43.6ha、葛飾区28.1ha、江戸川区37.8haで、合計109.5haとなっており、そのうちのおよそ90%が特定生産緑地の指定を受けています。一方、農家戸数(販売農家+自給的農家)は、ちょっと古いデータですが、令和2(2020)年の農業センサスでは、足立区224戸、葛飾区163戸、江戸川区285戸で、



管内ではハボタンの栽培も行われている

合計672戸となっています。

■ 都市農業のロールモデルを共有する

眞利子：管内の農業がそれなりに維持されているのは、都市農業のロールモデル（模範事例）がしっかりできているからだと思います。

その一つは、平成3(1991)年、第20回日本農業賞・個別経営の部で大賞を受賞した田澤農園（代表者：田澤一慶さん、江戸川区春江町）で、ハーブで受賞しました。新興作物のハーブを栽培し、地の利を生かして一流レストランなどに納品するといった市場開拓というか、川下からの発想がとても優れていて、都市農業の大きなお手本となりました。

わが家もそうですが、コマツナを含めて、管内の野菜は仲卸業者と予約相対取引（個人出荷）を行うのがふつうです。小売店、レストラン・日本料理店など、仲卸業者から先の販売ルートもすでに決まっています。

もう一つは、これからのロールモデルというべきものですが、令和7(2025)年1月、第54回日本農業賞・集団組織の部で特別賞を受賞した「K&K Farm（ケーアンドケー ファーム）」です。江戸川区でコマツナ栽培を行っている小原（こはら）英行君（同区春江町）、門倉（かどくら）周史君（同区鹿骨）の名前の頭文字をとってK&K Farmと名付けました。両君はJ Aの江戸川地区青年部で出会いましたが、共に代々続くコマツナ農家です。



◀左から小原英行さん、門倉周史さんのお二人

▼K&K Farmのコマツナは通常のものよりサイズが大きい



厳密には生産面での共同経営というよりも、販売面での共同経営といったほうが正しいでしょう。

それぞれが販路を広げてきた、紀ノ国屋などの有名小売店や日本橋三越本店といった百貨店への販売にしても、給食業者向けの納品にしても、ともに高単価で売ることができますが、いちばん嫌われるのは欠品です。そのため高品質な（一

定水準以上の)コマツナを安定的に供給することを目的に、令和2(2020)年3月にK&K Farmを立ち上げました。注文数には必ず応える、ということで高い信頼を獲得してきました。足りないときはお互いに補い合って「欠品なし」を続けてきたことが高く評価され、今回の特別賞の受賞となりました。

石田：生産は別々でも、販売は一本ですから、お二人のコマツナに違いがあってはいけませんね。

眞利子：そのとおりです。そのために栽培技術や出荷規格を統一するとともに、連絡を取り合って出荷調整もしています。年間7～8回の作付けで10a当たり1,000万円の売上高を実現しています。

石田：それはすごい。

眞利子：とにかく生産技術のレベルが高いのです。決め手は「水やり」だといっていますが、1株1株がものすごく大きい。われわれが見知ったコマツナとはわけが違います。本当のコマツナ。

またI P M(総合的病害虫・雑草管理)の手法を駆使して、病害虫対策をしっかりやっていますので、農場段階での廃棄はほとんど出ません。G A P(農業生産工程管理)の認証取得を含めて、先進技術の習得はこれからの必須事項となるでしょう。すでに何人かのフォロワーが出ています。

石田：たかがコマツナ、されどコマツナですね。

眞利子：加えて、両君は若手農業者へ栽培技術や経営手法の支援も行っていますし、経営以外では、子ども食堂や被災地へコマツナを無償提供するほか、食農教育にも力を入れています。

石田：J Aも学校給食へコマツナを無償提供していますね。

眞利子：そうです。都市農業のご理解を賜るうえで必須の取り組みと考えています。通常のコマツナ販売とは別に、年1回ですがJ A東京グループ担い手サポート協議会の助成金を活用して実施しています。

令和6(2024)年度は、11月に管内の公立小・中学校全273校に約4.8トンを提供しました。管内の農家38戸が生産したコマツナを青壮年部員らが各校へ直接納品し、約11万7,600人の生徒たちにコマツナ料理を味わってもらいました。

また、空白行政区(農地のない区)、たとえば墨田区、江東区などの公立小・中学校へのコマツナの納入や青壮年部員による出前授業も行っています。出前授業では実体験ではなく、スライドや紙芝居を見せて説明しています。

コマツナの発祥の地——小松川

コマツナ(小松菜)のもととなった野菜は「カブ」で、奈良時代から平安時代にかけて中国から日本に渡来してきた。古くは鎌倉時代からこの地域で生産されてきた江戸野菜の一つである。

当時のコマツナは、主に中川左岸の小松川地区(現在の葛飾区南東部・江戸川区北西部)で特産物として栽培されていた。徳川吉宗(綱吉という説もあり)が鷹狩りで小松川地区を訪れた際、献上された澄まし汁に入っていた青菜を食し命名したことが発祥の地の由来とされている。

「東京都農作物生産状況調査結果報告書」(令和5年産)によれば、当J A管内のコマツナの作付面積は、足立区35.2ha、葛飾区38.0ha、江戸川区141.0haで、合計214.2haである。これは東京都全体の56%を占めている。農業産出額は10億3,900万円で、当J A管内の農業産出額の45%を占めている。

農業産出額ランキングで第1位のコマツナは、第2位のエダマメ1億3,900万円、第3位のトマト7,800万円を大きく引き離し、圧倒的な存在である。ちなみに東京都全体でもコマツナは農業産出額の第1位を占め、第2位のハウレンソウの2倍以上の産出額を誇っている。東京都の地域特産物はコマツナといえるのではないか。



江東三区それぞれのキャラクターが描かれたテープで結束し販売されている

<参考文献>

J A東京スマイルだより「ほほえみ」2024年秋号(vol.98)、J A東京スマイル「農業振興計画書」